

初雁

埼玉県立川越高校

第三回卒業生句集



謹んで佐藤徳四郎先生霊前に捧ぐ

## まえがき

通称トクサンを忘れる同窓の友はいない。あの戦中戦後にかけて、旧制川越中学だけで去った友も、新制高校までの六年間を同じ校舎で学んだ友も、今や年々同期生として顔を合わせているが、その折々故佐藤徳四郎先生のこと話が話題にならないこともまたない。

教育も人心もきわめて動揺していたあの時期、あのぼろ校舎のなかで、いや、校外指導においても、終始一貫、異色をきわめたのがその佐藤先生のご授業であった。先生の最も油の乗った時期と拝察できるだけに、我々にとつては敵しいと感じられた一面、卒業後の我々を前にして「おまえたちもよくやった。あのころはよかったぞ」とお漏らしになったことにかんがみても、先生の熱情に最もよく応えたのは我々同期生だったのではなからうか。

いかにもやった先生の宿題の一つに、月々の俳句十句提出があった。これがこうして我々への遺産にならうとは、当時とうてい考え及ぶもしないことであつたが、先生は先生の師匠吉田冬葉主宰の月刊誌「獺祭」へと我々の俳句を送ってく

だざり、ついにはその誌上にあふれんばかりの「川越高校生徒作品」欄もできた。

この句集は、先生の十句は別にして、その「類祭」昭和二十四年三月号から同二十五年十月号までのその欄から、同期生全員の作品五句ずつを選んで成ったものである。選句・編集は元国文学部員大沢・益子・松木・山崎の四名が担当したが、もちろん、ここに至るには同期生各位の何くれとないご後援があったからこそであるし、特に印刷・製本関係の一切の手配を引き受けてくれた宮崎敏昭君の尽力は大きい。

又、東京に初の俳句会館を建てる神谷印刷株式会社の神谷忠一会長と神谷公雄専務に大変お世話になったので深く謝意を表したい。

この句集を契機として、かつての創作意欲がよみがえったり、ますます句作に磨きがかかったり、さらには同期会の話題がまた一つ増えて、会員相互の発展へとつながることを、トクサンも草葉の陰で喜んでくださることであらう。

昭和五十年秋

編集記す

故佐藤徳四郎先生

日のさして降る雨脚や蕎麦の花

草の実や日南に澄みし砥水桶

ピツケルの埃に残る暑さかな

師の声を霜にきゝけり乙字の忌

濁流のかへす陽をとぶ蜻蛉かな

小川町の寒澁きを見て

冬の川次ぎく堰きてして場かな

頼朝墓

後減りの石段たかし苔の花

竜の口

法難の御忌を終へたる雷雨かな

高麗郷にて

高麗にして雨あたくかき蜜柑かな

一樽の海鼠の荷あり年の暮

田 島 晃 夫

蜂のくる日和になりぬ枇杷の花  
雲にのみ日残る空や夕蜻蛉  
颱風にぬかれし桐の姿かな  
こほろぎの鳴きはじめたる風呂場哉  
柿の実のつらに当りし木の葉哉

西 勝 章 夫

六

セ  
コ  
ン  
ド  
の  
音  
の  
中  
な  
る  
夜  
業  
か  
な  
  
学  
び  
終  
へ  
て  
秋  
刀  
魚  
焼  
く  
町  
通  
り  
け  
り  
  
桐  
一  
葉  
う  
ご  
か  
ぬ  
水  
に  
落  
に  
ち  
け  
り  
  
病  
室  
の  
窓  
覆  
ひ  
け  
り  
秋  
ざ  
く  
ら  
  
観  
音  
堂  
に  
つ  
づ  
く  
径  
や  
松  
の  
花



伊藤

明

麦踏を幾人みたり汽車の旅

受験記を読んで寒月眺めけり

ピッチャー球といつしよに落葉かな

昼花火雲より白くながれたり

颱風や蝸まきこゆる実験室

沢田

明

八

亡びゆく河岸の場末や冬の水  
野火つけし戦闘帽をはたきけり  
雪どけの水せまりくる仮の橋  
試験日の友の小刃まぶしかり  
徒手体操ふりかへりざま青き空

菅間

昭

切貼のあと白く見ゆ障子かな  
講堂の屋根に残りぬまだら雪  
青々と障子をそめし若葉かな  
庭すみに露のとうあをく芽ぐみたり  
金魚売町角ゆるく過ぎにけり

葩 島

昭

一〇

東風吹くや落着きのなき家の猫  
吟行の選句とばしゝ野分かな  
泣く子供母の片手の生姜かな  
大木の打倒されし秋の空  
山宿の瀬音ばかりの夜寒かな

佐久間 幾 雄

夕 空 や た だ ひ と つ 藪 の 烏 瓜  
遠 山 の ま ぶ し き 雲 や 夏 近 し  
山 々 に 秋 風 吹 く か 青 き 栗  
岩 壁 に 生 へ し す 々 き や 秋 の 山  
飛 び か へ る 白 球 は や し 秋 の 空

町 田 郁 夫

しんしんと更けゆく母の夜なべ哉  
 川波に飛びうつりたる蜻蛉かな  
 独唱の我声ひびく夜寒かな  
 アルバイト夜露にうたふ帰り道  
 颱風やふるへて見ゆる母の顔

一色

勲

梅が香や開け放ちたる応接間  
夜風ただつよく吹きけり酉の市  
愛読書燈下にひもどく夜長かな  
春の香を押し出す初夏の雲白し  
校庭に月澄みきりし夜学かな

君塚

功

星ひとつながれて寒きケビン哉

木枯の空にながるゝ蹴球かな

川波に影さしととぶ蜻蛉かな

窓に揺るるコスモスの花の日和かな

刈麦の束かげにおりし雲雀かな



平井

功

餅の音ぬかり路にきく師走かな  
元旦やこたつにこもる犬の声  
水たまり多き野路ゆく雲雀かな  
夕立や蟬の声消ゆ稲光  
倒木にあそぶ童や秋の風

諸橋 一郎

一六

冬の日  
の田毎に  
反射す  
車窓かな  
長閑さ  
やテニス  
コート  
の球の音  
大島を  
のみかく  
しけり  
雲の峯  
遠足の  
子に貫  
ひたる  
あけび  
かな  
誘蛾  
燈とも  
りて  
雨を染  
めにけ  
り

谷

巖

節分や障子をはしる豆の音

ラグビーの時雨るゝ中を突き進む

浮浪児の苦手の雪のふりにけり

秋の夜のナイトゲームに厚着哉

小春日の大会ちかし猛練習

藤田岩雄

一八

病床の障子開けての花見かな  
稲妻や雲の中ゆく飛機一つ  
城跡の畠につくる大根かな  
夕立に降られて帰る登山かな  
城址に春は来にけり鳥の声

市村栄一

校庭にのこるラインや夕時雨  
窓ガラス破れて授業の寒さかな  
冬山やリュックをぬらす雲の群  
放課後の校舎のさびし蟬の声  
稲刈るや夕雲のわく秩父山

## 関口英輔

冬木たかく唸れる風を仰ぎけり  
楽隊につづく初荷の車かな  
さむざむと野にたつ杉や天の川  
秋風に吹かれて寒し茄子ひとつ  
人声の野をゆく春の夜明かな

岩崎

治

菊枯れて埃の目立つ机かな

木から木へ巢をはる蜘蛛や雲の峯

暮れ迫る木々かすめとぶ蜻蛉哉

初霜にコスモスの花哀れなり

あちこちと児の行くまゝの涼み哉

田中

修

うそ寒きばかり大根の白さかな

蟻んこや松葉ぼたんと青い空

初西瓜二つ並べて八百屋かな

ヘツドライトに鳴きひそみたる蛙哉

コスモスの枯れて濁りぬ水溜



小畑温治

松の葉の池にうつりし小春かな  
掃除する簾にからむ落花かな  
秋の山峯くつきりと空遠し  
蚊帳吊りて夏の気分に涵りけり  
芋植ゑし腰のいたみや春の空

吉田景美

門松の雪ちらしとぶ雀かな

桑の葉の落ちてうもるゝ鳥かな

干からびし柘榴に秋の風寒し

雪どけの泥のつまりし朴歯かな

梅もぎぎや我手にかゝる雨雫

内 沼 一 雄

紅葉の山のはざまに日は落ちぬ

吹きあぐる風の寒さや峯の雪

牡丹雪池にとけけり春隣

空ひくくちぎれ雲とぶ野分かな

颱風に倒れし菊も花つけぬ

## 小島一雄

停電の我家にさしゝ月夜かな

朝靄のつゝむ田の面や誘蛾燈

遙なる巻雲にとぶ蜻蛉かな

梅雨ふかく仮橋まもる燈火かな

梅雨明けの陽空に干しぬ下駄の山

塩野和雄

冬木立教会の塔聳えけり

秋雨やかすみて見えぬ浅間山

秋風の吹きはじめたる野球場

五月雨やともし火もるゝ丘の家

夕立にうたると鯉の頭かな

## 比留間 和 夫

うねく と麦のなびきて山の春

稲の穂の垂れきつて寒さにけり

新築の声ひびきけり秋の空

橋落ちし水にとびる蜻蛉かな

颱風に光よわりし螢かな

山田和夫

春近く屋根の雀の声せわし

汽車おりの顔さまさまに年の暮

金魚鉢けはしき雲を映しけり

体操の手のひらめきや五月晴

春めきし庭を見たまふ雛かな

山田和宏

初夢や障子の外の朝の雨

大晦日湯呑の湯気の白さかな

秩父嶺のかすみてみゆる秋日哉

梅雨明けを鳥の巢立ちし若葉かな

虫の音に誘はれて庭ありきけり



越

克

己

バスを待つ風にひらめくシヨールかな

マラソンやくもる臉に雪の峯

野葡萄やむらがりとんで尾長鳥

朝顔のからむ垣根の時雨かな

梅の実をぬれ草分けて探しけり

## 大 島 和 道

ほえたける吹雪にザイル凍てつきぬ  
槍ヶ岳バラ色なして冬暮るゝ  
ケーブルのリフト凍てつき陽の未だ  
秩父嶺は我をよぶなり雲の峯  
冬の日のノートにうつる授業かな

大 山 勝 地

登 校 や 霜 を ふ み つ ぐ 夜 明 道

倒 れ た る 茄 子 に 杖 や る 秋 日 か な

赤 蜻 蛉 く る り と 廻 り 止 り け り

栗 の 花 白 で 我 身 を 蔽 ひ け り

麦 播 け ば 山 々 遠 く か す み け り

青木勘輔

烏瓜萎へつゝ年の迫りけり

メーデーの列先よぎる燕かな

学舎の窓すれぐの若葉かな

寒紅梅進駐軍に折られけり

床板をぬいて竹の子伸びにけり

中 島 喜三郎

亡き父の着物みぢかし年の暮

薄日さす秩父の山や肌寒き

初秋や秩父の空のひとつ雲

教室の窓にうつりし蜻蛉かな

テープ切る胸のマークに秋の風

畑

喜千松

山鳩を追ひつゝ麦をふみにけり  
粃を摺る音に和したる読書かな  
煮蕨を茶うけにしたり峠茶屋  
蜻蛉の翅に露おおく朝日かな  
山里の屋根石うごく野分かな

飯田清司

秋風や古城の松の鷹ひとつ

風鈴やしづかにひぶく雨の後

夏草にとびはしやぎたる兎かな

桃一つ浮きしづみたる桶の中

中村喜代治

除夜の音に合せてうちし夜番かな  
遠き燈に影うく道の寒さかな  
靄かゝる木の間に遠し誘蛾燈  
天地をひとつにしたり五月雨  
梨、畑の見張の小屋や秋の雲



小鷹邦夫

残雪の夕日に映えし校舎かな  
夕空に十字をつくる蜻蛉かな  
秋風や箒にかゝる蝶一つ  
風鈴の音たかまりて夕日落つ  
うめもどき夜店の空に立ちにけり

丸 田 邦 夫

ひゆうくくと枯枝の鳴る寒さ哉

鶏の声のどかなり日向ぼこ

榆の木を伐り倒しけり冬の空

映画館出る人波や天の川

延長のあきた試合や雲の峯

小鷹邦彦

木枯や乾田にふかき足の跡  
空遠き雁の行方や秋の暮  
窓越しの屋根またぬれし梅雨かな  
汗ふくやつくく法師啼き競ふ  
小豆もぎこほろぎ穴にかくれけり

新藤邦泰

四二

納豆の売声消えし焚火かな  
手洗水に投入るゝ花や初水  
春雨や柳にふれて飛ぶ燕  
花菖蒲影ある水の目高かな  
夕暮に鯉はねてゆらぐ花菖蒲

糟谷

熊

羽子つきにまじりし父や屠蘇きげん  
月の園に一本たかし日輪草  
隈笹の花の中ゆく登山かな  
山柿の実のこる枝や眠る山  
銀河仰ぎ仰ぎて石につまづきし

本多

啓

白足袋の畳に触るゝ寒さかな  
何事も叱言ばかりの年の暮  
きゝ猪口にうかぶ燈影冴え返る  
メーデーの歌より夏の立ちにけり  
蟻の塔一夜の雨に流れけり

高山 恵介

雙六や英語おぼえて叔母の番  
春風に追はれてちかき家路かな  
朝寒や枕元なる太鼓の音  
梅雨くらく心も身をも湿りけり  
電燈の笠にとまりし蜻蛉かな

川 合 敬 三

バスケットリングに散りし梅の花  
校庭や霜ふみしめて表彰式  
シールス軍来りて空高く澄む  
教卓に梅の実一つころがれり  
新緑の一瞬せまりカーブある



加藤

健

水切りて三日も死なず寒の鯉  
鏡餅ねずみに引かれ小正月  
霜どけのどろんこ道や歳の市  
ぼろくゝの聖書のみけり降誕祭  
桑の芽に暁の雨しづかなり

渡 辺

謙

四八

冬 枯 や あ ら は に な り し 葱 島  
遠 足 の 列 の な が さ よ 秋 の 空  
風 鈴 の 忘 れ 鳴 り し て 夜 半 の 秋  
も ぎ 尽 す 唐 も ろ こ し や 虫 そ ぐ ろ  
筍 の 艶 あ ざ や か に 掘 ら れ け り

齋藤賢治

カレンダー一枚めくる寒の入  
天井の湯気にかくるゝ寒造  
夕風に麦の穂たわむのどかかな  
秋晴や運動会の万国旗  
木に登りて毛虫の中の梅落し

関根憲治

辞書引きて一日過ごす炬燵かな  
ゴールして点報ひたり冬立つ日  
パレットに青を濃く溶く夜寒哉  
シヨート右にぬかれし球や日の盛  
春風や喜多院の古き濠の中

竹内健治

麦手ちや埃の中の笑い顔  
寒空に投売の声かすれたり  
実験のグラスにうつる冬の峰  
青空にまふ風船や秋祭  
冬近し燈に母の編む毛糸玉

岩 沢 謙 三

初雪の高麗の流れに消えにけり  
ざはくと輪になりてゆく焚火かな  
しろがねの露垂るゝ玉菜運び行く  
ぼっねんと栗売る人や秋祭  
歓声にとび翔つ椋鳥や運動会

小林堅造

物落つる音ひびけり今朝の霜  
刻み終へて仰ぐ樺林春近し  
櫛の実や風にこぼるゝ日暮時  
唐黍を倒してすぎしキテイかな  
梅の花試験の紙に映りけり

高橋光一

書初の窓をのぞきし雀かな  
クリスマス思ひうかべつ劇稽古  
礼拝に息はずませしキャンプ哉  
切下駄を提げて帰りし梅雨かな  
夕焼に声をあげたるキャンプ哉



安田孝一

干桶に名残の霜のかがやけり  
枯枝にむるゝ雀や寒に入る  
白菊を活け終へてより習字かな  
栗の花けぶりて匂ふ梅雨かな  
夕立の過ぎて夜空に星流れ

遠藤公平

窓ごしに雪ふみゆくや納豆売

父恋ひし炬燵ふとんの菊模様

懸崖の菊に朝日の光かな

朝寒や電車の音の遠かりし

吹き巻くる大風去るや虫の声

奥 富 弘 明

眠られぬまゝにきゝけり除夜の鐘  
売出しの旗もうごかず今朝の霜  
雲雀野や牛追ふ声に暮れかゝり  
建具屋の鉦の音に春立てり  
スタンドの笠に逆立つやんま哉

柴田五郎

初大師もまれつゝ友にわかれけり  
菜の花の真盛りなる夏立ちにけり  
合宿の眠られぬ夜や蚊帳の中  
秋深し町に殖えたる壺焼屋  
畠中の径つづり咲くれんげかな

長谷川

栄

寒々と木の葉のこるや二三枚

天覧山の道咲きつづるつじかな

鈴虫やしづまりかへる桃青忌

我家の風鈴に風つのはりけり

体操の背中見せあふ日焼かな

加 畑

栄

四五本の庭木うれしや今朝の雪  
本箱のちらかるまゝに年明けぬ  
渡り来し高麗川橋や秋の水  
芋畑の古株桑や百舌の贅  
テーブルの一輪ざしや白つゝじ

朝久野 貞 郎

唐豆を干しさびれけり 田舎道

面白や父母のダンスの新年会

麻雀のかきくづす音 寒夜かな

サーカスの楽屋の外の花かな

蜘蛛の巣を傘にはらふや 五月雨

新井貞夫

蝶つたふ土手どこまでも春日かな

こほろぎの声消されけり祭笛

稲妻や飛ぶ蚊の見ゆる蚊帳の中

蕭条と昼の月あり秋の風

繭玉の下にざこねの親子かな



石川貞夫

夕雨の花洗ひたる黄菊かな  
入間野や麦踏を見て登校す  
赤々と南天の実に夕日かな  
鉢植の朝顔の花咲きにけり  
幾年も花に風吹く椿かな

双木貞夫

学び舎の窓にせまりて山眠る  
荒畑にながき影あり冬木立  
頂上の丸太の茶屋や若緑  
教室にひびく花火や秋祭  
夏山や遙かに白き積乱雲

村山祥男

春場所の大鼓ひびけり雪もよひ  
雨ふりてきゝ耳たてぬ除夜の鐘  
寒月の火の見櫓を照しけり  
手花火を持ちたる子等の日焦顔  
夕つばめとびかふ下の田植かな

岸

六六

智

登校の心ひかるゝ焚火かな  
雪とけて野梅咲きそむ彼岸かな  
晩秋や雨あがりたる空の色  
ホームより眺むる桐の花もよし  
父について祭戻りや虫の声

広 沢

聰

棟 上 や 仕 事 始 の 槌 の 音

大 根 干 す 母 の 顔 に も 年 迫 る

子 供 抱 い て 山 車 を 見 に ゆ く 祭 かな

枯 草 に 咲 き の こ り た る 野 菊 かな

睡 蓮 の 花 さ く か げ の 蛙 かな

正木

茂

天井に蠅かたまりて朝寒き  
塀越しに蟬とる網の伸びて来し  
秩父路を沢蟹這へる時雨かな  
三芳野の田づらにたちし案山子かな  
グラウンドの隅にみつけぬ花莖

浅見茂男

雪どけの道の凍てたる寒さかな  
羽子つきに髪ををどらす娘かな  
夕暮や藷をはこべる家遠し  
夕焼の空にとびかふ蜻蛉かな  
照りかすむ遠き家路や麦の秋

水口重男

石梨の虫に落ちたる土用かな

時雨るゝや山車の会所の酒の歌

病身の兄も寝入りぬちゝろ虫

長糸瓜一つさがりぬぶどう棚

べんけいに鯰もさしぬ秋の風



森田重敏

梅咲くや那須余一の墓所

筍や枯葉の帽子押し上げて

鳴子縄土間に引込み俵編む

兎見て抱きたくなりぬ冬の朝

光風に馬おとなしく通りけり

永島 俊三郎

みみづくの鳴く音ききいる蒲団かな

ミシン踏む音ひびきくる夜寒哉

こほろぎや水面にうつる月寒し

鯛や白雨すぎてまた暑し

ざくろの実ひとつ残りて冬の空

江原

襄

立冬や霜に焦げたる甘藷畑  
たんぼよの咲く大岩や山の春  
境内の箒目に散る一葉かな  
朝顔の咲き放題の空家かな  
藁を打つ音はるかなり冬うらよ

橋 本 正 一

七四

粗を摺る納屋に夜寒の燈の揺るゝ  
菜の花や田舎まはりの小商ひ  
練習の汗ほす木蔭蟬の聲  
春近くカメラ携へ散歩かな  
教室に遠き蛙をきく夜かな

氏 家 昭 次

通学の列車待つ間の焚火かな

大寺の山門遠し枯木立

艫の音をきゝつゝ沖に泳ぎけり

二 三 本 鶏 頭 赤 し 芋 畠

小春日のトロツコの上の昼餉かな

岸 昌 次

白梅のほころびとまる余寒かな  
落葉踏む音やひそかに黄昏るゝ  
霜深し窓近う来て百舌の啼く  
盆すぎし闇の小径や虫の声  
夕星や苗代ひそと澄むところ

松岡章次

荒畑や風蕭々と冬の雲

武蔵野やすゝきのはての秋の雲

秋風や雲のたなびく監視哨

濃き淡き寺の紅葉や神無月

颱風一過とびし瓦に屋根師かな

小川 司 郎

草の戸や白を仕舞うて年の暮

白菊の香もあたらしくシヨールかな

春の山草履を穿いて登りけり

飛びかうて一つはくらき螢かな

春雨に花さく屋根の小草かな



阿部新一

人垣に押されて見るや、達磨市

枯野より来てあかあかと火を焚けり

団栗の掌に夕焼けけて里遠し

グランドの整備作業や春立ちぬ

大晦日時計は何も知らざりき

## 中田仁成

かるた会氷る星仰ぎ帰りけり  
七草の粥のさめたる朝寝かな  
満開の梅を持ちたる墓参かな  
朝寒に夢やぶられしキャンプ哉  
麦刈りの円座つくりて昼餉かな

島田真三

年賀状なつかしき友もまじりけり  
寒がりて近づく猫や漱石忌  
夕闇やおんぼりとして雪に達磨  
木の間より池の藻てらす夏日かな  
窓越しに桐の一葉や暮の秋

田中 崇

水 涸 れ て 山 静 な り 空 の 月  
杵 音 に 髭 そ る 父 や 忘 年 会  
藪 拓 く 土 の 匂 や 揚 雲 雀  
古 井 戸 や 落 葉 の か げ の 鮒 の 影  
藪 拓 く 土 の に ほ ひ や 落 の 臺

新井澄夫

母病める天井煤に明けにけり

木枯や荒海てらす探照燈

朝寒や白粉ふきたるつるし柿

鉄棒に雲の花さく秋の色

藪掘りし波の手のまま登校す

## 伊藤純夫

初雪に愛犬つれて散歩かな  
遺家族のひとしほ寒し年の暮  
春泥や野路遅々とゆく牛車  
冷麦や夕餉にぎあふ子沢山  
重たげや南瓜のみゐる屋根の上

松 本

進

さゝ啼や朝日のあたる垣づたひ  
空豆のほふ畠やおぼる月  
秋の夜や燈してならふ稽古獅子  
麦打ちの麦とんでくる障子かな  
熟れ柚子に眩しき朝の雲ながれ

豊田

孜

八六

末黒野にたなご釣る餌箱置きにけり  
木瓜の花くれなる淡く茂りたる  
西瓜割るはだか童や日の盛  
柿熟れて運動会の空高し  
寝つかれぬ夜の更けゆくや遠蛙



齋藤清一

架稻の日に毎に減つて秋寒し

病床に雨だれきよつ年立ちぬ

盲人の杖つく道や薄氷

梅干の棚に散りけり合飲の花

夕霧の刈田にのこる案山子かな

荷田精治

秋の空たかく澄みけり百舌鳥の声

秩父嶺に夕日落ちゆく案山子哉

向合うて母と焼きたる秋刀魚哉

泥搔いて魚とる子等や夕蜻蛉

泣ける児に買ひなだめたるキャンデー哉

中 村 生 秀

赤間川流れとまりし深雪かな

独りありく入間の野路や葱坊主

異人兵カメラかゝへて花の山

丑の日や梅を干し来て西瓜割る

梅雨くらし唯ひとり見る美術展

金 島 壮 行

有明の月ある野路の寒さかな

芥焼く煙たちけり冬日暮

朝寒や塵ひとつなき白道路

稲妻のはしるや雨脚ちかづき来

流星の夜空にすきぬ庭行水

新井 淙平

弁当にもちくる餅や旧正月  
静けさや話とだへて夜半の雪  
夜想曲なほ冴えにけり天の川  
夕暮やだらりと垂れて鯉幟  
秋風や力なくなるはさみ虫

## 守谷

## 互

初春や木立あかるき山の色  
繕ひの祖母の手にさす冬日かな  
客絶えてしづかな昼や冬椿  
鶯をうたがひきよぬ里の春  
ピンポンの球月光の窓に飛ぶ

山崎孝雄

冬山をめがけて走りトライかな  
這入りては用たのまるゝ炬燵かな  
先生を後に青葉の登山かな  
習ひたての唱歌と共に麦を踏む  
洪水引かず無月なりけり仮の橋

小沢孝志

篝火にとけゆく霜や初詣

七夕や更けてつゆけき天の川

行秋や雨のごと降る櫛の実

栗の花花火のように咲きにけり

桐の葉の千々に裂けたる野分哉



柳 沢

隆

山門を出て道遠し冬木立

からたちの花の雨とぶ蝶々かな

陸稻刈つてほのめく汗や秋の雲

五月雨やともし火消ゆる藪の家

蝦夷菊の花倒しけり初嵐

鎌田隆尙

獵犬の嗅ぎ嗅ぎゆくや雪野原

風音の空かけめぐる師走かな

涼台に置き忘れある団扇かな

蜻蛉を追ひかけて見る雀かな

鰯雲たゞよふ空や今朝の秋

田村武男

雪しぐれきゝつゝ毛糸編みにけり  
暑き日のあばら家かくす若葉かな  
破れたる盆提燈やきりぎりす  
茶の下にとべぬ雀や春の雨  
流燈の波のくぼみををどり出づ

五十嵐

威

夕映に頬をそめつゝ麦ふめり

寒造りするや杜氏の真裸

麦の芽や葉先にむすぶ露の玉

セコンドのみ耳につくなる冬夜かな

秋風や忘れられたる涼台

金子 武 司

噴煙の静かに秋の日を返す

朝寒や寄り添ひかたる祖母と孫

明けやらぬ冬山遠く月青し

永雨にひそとキャンデー売場かな

広き田の麦の芽そろふ小春かな

原

武

弾初の弓を静かに納めけり  
売葉の女いこへり菊の花  
北風に取のこされし案山子かな  
移来て友なき吾子や蜻蛉つり  
赤蜻蛉みな夕焼の空にあり

西  
健  
美

窓に凭り視界展けて空寒し

水盤や白き芽うつす猫柳

弾初めのまにくきこゆ羽子の音

庭垣に咲きて匂へる黄菊かな

十字架のそびゆる墓や蔦紅葉

## 小峰忠夫

夕空や風ゆれもなき冬木立  
甘藷の花活けつゝ月を祭りけり  
追羽子や長き袂をからませて  
稚児のひく祭の山車や秋の風  
鶏子売りの泊りし町や梅雨寒し



川崎

匡

夜業して柚湯に入りし冬至かな  
雪に照る月影さむし大晦日  
乱れたる水菜の花や春の雨  
落ちつかぬ試験まぢかし秋祭  
霧けぶる峠の路の焚火かな

永田正

ビール麦の穂波の白し風の筋  
さむざむと実のなき柿や月の秋  
睡蓮の葉に映りけり秋の空  
大木のかしぎかゝりし野分かな  
梅雨川に丈のみぢかき菖蒲かな

駒井忠彦

陽炎に乗つてとびたつ雲雀かな  
病床やいちりん挿の藍袴  
夏休みの校庭寂し蟬の穴  
南天の花のみ白き梅雨かな  
朝霧のはれてかがやく若葉かな

府瀬川 忠 芳

麦の穂に腹すりかへす燕かな

コスモスや葉に花にあるよべの雨

花とぢし松葉ぼたんや片かげり

歯痛みに蟬の声も聞きにくし

アンテナに音して風の光りけり

土 金 達 男

懐しや壺つり焼の藪の味

ストーブに子供あつめてクリスマス

手入するスケート靴や初氷

向日葵や暮れきらぬ空の流れ星

春の日の居ねぶりのさす授業かな

小 沼 達之助

牛啼くや木蔭に憩ふ田草取

行水のなごりや糸瓜棚の花

朝日暑し燃えのこりたる蚊遣草

草つけて田植戻りや牛車

颱風に棚つぶれたる糸瓜かな

岡田立彦

新緑の天覧山や空青し

下崩えてグラウンド工事進みけり

肌寒し雲をよるべの雁ひとつ

十葉の花十字架の如く咲き

脱穀の音騒然と月の秋

小 熊 忠 三 郎

冬 の 田 や い つ ま で 見 ゆ る 郵 便 夫

月 落 ち て 星 の き ら め く 寒 さ か な

柿 喰 う て 寝 気 さ め た る 夜 長 か な

菜 の 花 や 黄 色 に 映 ゆ る 麦 畠

校 門 を 塗 り た る 後 の 春 日 か な



大川

解

機関車が變りて寒し峠越え  
崖急に落葉ふるなり指導標  
風寒く冬草さがす野牛かな  
木枯の吹き入る音や試験前  
若草や人いそがしく牛の声

齋藤

恒

雪どけや竹起きなほる音しきり

お茶の芽の雫にぬるゝ巢立鳥

コスモスの花の影あり初筵

秋風や出来上りたる一軒家

どくだみの花ただ白し荒れし墓地

長 島 恒 雄

耕牛の息もみだれて秋の暮  
君逝きてはや三月なり冬の雲  
名月に犬の遠吠えきこえけり  
生姜洗ふ水より秋気立ちにけり  
紙鳶ひとつあがれる空や冬の雲

細谷哲夫

岬 嚙む浪路はるかや寒の月  
稲刈や夕日に映ゆる父の顔  
雲ひとつなき青空やきのこ狩  
風に伏しゝ田毎の稲や月の秋  
あれやこれ虫の音きつゝ句をねりぬ

鈴 木 徹 也

眼に青葉せゝらぎの音澄みてあり  
秩父嶺の夕焼けてとぶ蜻蛉かな  
麦刈を見舞ふさまなる燕かな  
夕立に白百合すがし夏木立  
散りそめし学舎の梅霜にやけ

水村哲也

羽子つきの音も絶えたり寝正月  
思出の年の去りけり除夜の鐘  
寺にとる句座ひつそりと蟬の声  
傾ける屋根の上なり百目柿  
おぼろなる月ながむ夜や遠蛙

秋 山 輝 一

初富士や葡萄枯れたる棚の上  
酒造る若者の歌や春の雨  
颱風の去りてふたたび残暑かな  
時雨忌に枯れたる庭の芭蕉かな  
夕立や家路の方の空遠き

石田照男

転び落つ毛糸の玉や草紅葉  
麦の穂やしづかに降りて暮の雨  
柿たわゝに社務所あかるし秋の夕  
栗ひとつ落ちてはもとの静寂哉  
風吹きて匂ひこぼるゝ若葉かな



五十嵐 統 祥

土手の道真白にながし月天心

苗代や水にさからふ群目高

秋めくや巻雲たかき秩父山

梅雨明や鞍部にのぞく空の色

葡萄棚結び了れり朧月

宮崎敏昭

夕月や糸瓜の腹の片光り  
ひとひらもこぼさず菊の枯果てし  
風吹いてうちかたまりぬ蛙の子  
枝伐りてからりと高き青葉かな  
春泥を語りつ靴を研きけり

内海俊郎

蒸籠もぬれしまゝなり大晦日

うたゝ寝に夢うつゝなり除夜の鐘

野鳩啼いて花ぐもりして河原藪

狭山路に啼く頬白や秋の風

静かさや野分の前の雨の音

齋 木 敏 雄

初恋のながきたもとや福寿草

甘酒を友と飲みけり初大師

菊売の小車いそぐ祭かな

雨だれの音ばかりなり秋の暮

馬鈴薯の花ばかりなり梅雨出水

鈴木俊雄

稲架おろしまぶしき夕日浴びにけり

挿水をして汲む井戸や蟬時雨

秋晴や稲架の上なる遠き山

古風なるレコードかけし梅雨かな

病人のもてあそびるる蜜柑かな

東  
敏  
雄

ラグビーに雪ぬかるみとなりけり  
大根を抜く手つめたし夕時雨  
竹の子や四五本伸びて畑の隅  
無花果ややゝ赤らみし雨の中  
麦刈りのノゲ背に入りて汗ばみぬ

加藤敏一

行年の塵をあつめて焚火かな  
朝顔の葉うら見せけり秋の風  
毎日の大根洗ひの寒さかな  
蜻蛉や夕日の中の甘藷掘り  
花火あぐる夜となりたり涼台

村山利喜

春の日に講堂の屋根光りけり  
富士白く余寒の町の長さかな  
雛店を余寒の人の覗きけり



相田俊孝

中天に月冴えにけり竹に雪  
麦笛を鳴らして戻る童かな  
櫓の実の屋根うつ音に夜更けたり  
食卓やすぶしき皿の胡瓜揉  
柿の葉にほゝを打たるゝ野分哉

浅井敏彦

冬  
の  
朝  
猫  
し  
の  
び  
よ  
る  
竈  
か  
な

春  
光  
を  
背  
中  
に  
う  
け  
て  
畑  
仕  
事

曙  
の  
ひ  
か  
り  
と  
見  
え  
し  
梅  
の  
花

色  
も  
な  
く  
吹  
き  
か  
ふ  
風  
や  
萩  
の  
声

桐  
の  
花  
さ  
き  
か  
す  
み  
け  
り  
秩  
父  
山

浦部俊久

見なれたる棚の小脇や初暦

若水を雨にうたれて汲みにけり

酒樽を洗ふ童や冬の風

植木師の鋏の音や秋日和

飛んで来て鳴き出す蟬の暑さ哉

## 森田利寛

わらはべの木をもちよりの焚火かな  
夜中まで書きつづけけり年賀状  
遠足が集る駅前の焚火かな  
大木を根こそぎ倒す野分かな  
落されし栗を焼きる野分かな

橋田敏之

朝寒く手桶の水を替えにけり  
水道の被藁つつく雀かな  
花茗荷つみ戻る秋の時雨かな  
夕立に迷ひ雀の雨やどり  
藪畑の忘れ手鎌や露しぐれ

岩 沢 富 世

指さして貰うてとりしかるたかな  
手枕にラヂオ終りて夜番かな  
春風や鯉のおりたる幟竿  
巢燕の羽のよごれし梅雨かな  
蠅一つガラス戸に凍る寒さかな

半田

登

凧や水漬たらす道普請

柿ひとつ日にかがやきて秋深し

梅雨草をむしり散せし展墓かな

鮎釣るや瀬風にゆるゝ月見草

洪水の堤にみなつく蝨かな

森岡

昇

長々と夕日の影や枯木立  
白蝶の舞ひ入る庭の暑さかな  
元日の深閑として読書かな  
電燈と蟲と読書と夜半の秋  
瓦剝がれて屋根土見ゆる残暑かな



高橋信良

新たなる敵の入りたるかるたかな

頁繰る音もしづかに夜半の秋

代数に初秋の夜をふかしけり

頁繰る辞書の香りや秋の風

線香の皿やおちたる蚊の哀れ

小野則彦

大晦日掃除の音に暮れにけり

竹の子や薄ぐらき土間に二三本

初秋や燈火したひて蛾のひとつ

ライター照して道戻りくる冬至哉

蟬ひとつつ鳴いてとびけり雲の峯

北 崎 詔 彦

晩秋の風にふかるゝ木の葉かな

町角にもみあふ山車や秋祭

森の中淡き日ざしや秋の風

向日葵や校舎のかげに花一つ

山々のけぶりて見えぬ梅雨かな

五十嵐 甫

英単語口ずさみつゝ日向ぼこ

ペンを執る机に映ゆる若葉かな

バラツクを覆うてあかるき若葉かな

鍬を持つ父の笑顔や揚雲雀

朝顔に寝ぼけし顔をさましけり

野口八郎

我家見えて雪どけ畑の廻り道  
床下げの土残しある冬田かな  
縁日や若葉の下の金魚売  
秋草の花さす駅の正常歩  
風かをる学園の扉押していづ

新井治雄

霜白し鳥に歟の音寒し  
急ぎ足に行く道てらす冬の月  
幾年も忘れず巢くふ燕かな  
土間隅にこほろぎの鳴く夜寒哉  
落葉かく声のきこゆる静寂かな

大野春雄

洗面器流しにかたく氷りけり  
夕空に雁鳴きわたる野原かな  
げんげ咲く中にすまへる童かな  
無花果やもぎに出でたる井戸の端  
七夕をかざりて清き夜空かな

神田寿夫

千大根月の光に白く映ゆ  
雪どけや拾ひありきの田舎道  
安売りににぎあふ街や年の暮  
れんげ草咲きて賑ふ田圃かな  
只一人帰途につきけり秋祭



鈴木 寿雄

甘辛き大根の香や冬の朝

冬晴や鍬一挺の畑仕事

麦の穂のそろく出づる暖かさ

夏山に向いてあゆむや田圃道

稲妻のわれて落つるや森の上

松村

久

まゝごとやひとときは太き落の臺

残雪の肌に塵あり春鄰

木犀の匂ふ夜となる祭かな

風鈴の鳴らぬゆふべの暑さかな

立秋や雨を祈りの人の影

白井尙世

十文字の峠に佇ちぬ秋の風

ばさく と鴉とびたつ冬の墓

足元を野分吹きけり峠茶屋

秋刀魚焼く煙這ひゆく時雨かな

ぐみの実の紅く透く日や梅雨晴間

荻野英夫

夜道ゆく朴齒の音や雁の声  
美しき落陽見つゝ麦踏みぬ  
林道の二人にあまし初夏の風  
雨降りてひときは伸びぬ葱坊主  
床上にこほろぎの鳴く出水かな

奥隅英夫

諸車のあと押す道や冬木立  
薄暗き部屋にいけたる牡丹かな  
笑み栗をこぼして百舌の鋭声哉  
月清し散歩に選ぶ田舎道  
五月雨や蛙鳴きかふ夜の道

中 秀 男

雑沓に暮れゆく町や松飾  
貯水池の水ひろくと若葉かな  
夕焼に映えて紫珠のぶだうかな  
置鈎をあげたる岸や朝寒き  
教卓やいちりん挿して水仙花

西海英夫

襟たてゝ読書する夜や隙間風

川越や甘藷を輪ぎりの老母達

葉に白き雀の糞や稔り粟

秋出水千日坊主浸しけり

雨どひをつたはる雨もあたゝかし

根本 暎 男

喰べようと妹のつみ来し土筆かな

花糸瓜咲きふさぐ窓の涼しさよ

梅干して風匂ひくる土用かな

稲妻や田舎湯殿をあらはにす

花吹雪酔ひつづれたる上に散り



細田英雄

葬列の過ぎし墓場の落葉かな  
校門をいでて吹かるゝ野分かな  
寒空のただ映りゐる野川かな  
焼たての甘藷の熱さや秋の風  
刈草の香つよき朝や夏に入る

松本英男

長き影ひきて  
麦ふむ年の暮  
射込みし冬日に  
逃ぐる埃かな  
残菊やうす日  
のあたる庭の石  
新築の校舎の  
屋根や雪残る  
夏川を見おろし  
て山登りけり

村 山 英 夫

汽車すぎし鉄路の光る時雨かな  
隠居所の縁あたゝかし福寿草  
病室や天井にひとつ冬の蠅  
朽ち船の水草にとぶ柳女郎  
雨浴びて飛びこんでくる燕かな

阿部秀樹

停車場を人でうづむる吹雪かな

秋立やうまおひとまる掛簾

芋の葉に光のおつる寒さかな

日の石や翅落したる赤とんぼ

朝寒やいつもの角の納豆売

飯田

宏

新米を小鍋にかしぐ病かな

雪解けの水音きゝつ授業かな

はたと止んで後は鳴かざり法師蟬

宵鳴きの蛙に焚きし蚊遣かな

梅畑の根方に青き野蒜かな

大 沢

弘

マフラーの二人寄りそふ師走かな

突風にまひあがりけり鯉幟

妹といなご追ひゆく野道かな

無花果や雨に打たれて井戸の端

麦刈やキヤンデー売の鈴の音

加藤

博

羽子をつく力余りてよろけけり

木枯や石につまづく下駄の音

試験勉強まだ一日ありと懶たり

打水を幼きものに任せけり

落葉焚く煙のうへに月ありぬ

喜多

弘

投入れし新聞のたほす霜柱

横雲のみな朝焼や納豆売

亡き人の日記よみたる夜長かな

夜祭や友とはぐれて風寒し

蟬一つ蜘蛛に巻かれて空青し



西川

博

雪峰の浮び出でたり雪野原

戸袋に山吹の雨かゝりけり

盆提燈母の櫛を照らしけり

朝寒や仏飯にたつ湯氣しばし

梅雨寒き風に八手の落葉かな

益子弘道

淡雪に飯くふ寒き校舎かな

蚊帳の裾ふかるゝ中に寝てるたり

打水をわづかおぎなふ夕立かな

草むしる手首をとかけ走りけり

冬の日の柱めぐるや蠅ひとつ

水村博光

カラタチの棘更に冴ゆる霜夜かな  
竜巻に芝生なびける日向かな  
朝寒や水にうきたる蟬の殻  
床の間や姫百合いけて風涼し  
桐の木や吹き倒されて月の影

斎藤弘行

水涸れし池のまはりの落葉かな  
入間路のほこりまみれの野菊哉  
刈稲をたばぬる膝の稲子かな  
霧晴れて日和田の山の錦かな  
向日葵の首もだらつく暑さかな

長江 不二男

枯枝もふるへる空や寒雀

松のみどり色ます毎の寒さかな

月影にそよぎつめたる薄かな

更くる夜や草をはなるゝ虫の声

簾越してながるゝ風や蟬の声

角 谷 文 昭

美しき顔を揃へて茶摘かな  
ふんばつたまゝで流るゝ蛙かな  
火取虫妖しき影の大いなる  
実験に腹さかれたる蛙かな  
さみだれや苗植ゑにゆく乙女達

山下文司

夜道行く燈にとび逃ぐる蛙かな  
露の臺瓦もたげて花咲きぬ  
行く径を順に開けゆく蝨かな  
流星や尾を曳きおつる芋蟲  
夕風やゆれてましろき花いちご

横 田 平 三 郎

垣の根に捨てたる灰やはこべ草  
バックする野手に無心の秋の空  
煙突の煙とばすや冬の空  
銀翼を大きくつゝみ夏の雲  
子羊の顔にも二百十日かな



奥田

誠

朧月ばけつにこそつく蟹の音  
鳴く虫に向ひあひたる机かな  
泥土にうろつく蟻や夕立晴  
草原や光る若葉のはしり水  
春の燈の消えて巢になく鼠かな

松 木

信

十夜僧ひとりたちたる気配かな  
大講堂掃除終へたる寒さかな  
湧き水の湧く音もなし日の盛  
叱られて苺摘み摘み日は暮れぬ  
山吹の咲いて囲炉裡を塞ぎけり

柳田正昭

芋の茎萎びて赤く日は落ちぬ

道せばくともし火よぎる落葉あり

春雨や葉書が二枚縁の上

空高き棕櫚の葉風や赤蜻蛉

夕風や麦稈帽子とつて見る

杉 本 雅 夫

夢ほどく朝のひかりや梅の花  
道端の焚火にのこる寒さかな  
川音のひとりたちけり春の風  
フラスコに影うつしたる若葉かな  
月かくす雲と見えたる稲架かな

高梨昌夫

神棚を浄めて待ちぬ除夜の鐘  
餅つきや父にかはりて今年から  
桐の実や落ちて踏まるゝ泥の中  
水泳や汽車よりおりる黒い顔  
藤の花風に吹かれていと哀し

清 水 正 勝

つゝましく客となりけり庭紅葉

春風や微熱のつづく二三日

野に出づれば風ばかりなる二月かな

夕空をせはしく飛べる蜻蛉かな

田道にて青草生えて春来たり

豊泉正次

行秋や百日草の末の花

地に還るおもひ鳴き澄む秋の蟬

熟麦の畑道を行く日傘かな

露すずし草の中より見ゆる空

熊笹をおさへて幾日残る雪

吉野正武

思はずも蒲団を直す夜半かな  
餅切つて新なる年を思ひけり  
囀りや日をあびて佇つ山の上  
街路樹に友まつ昼の残暑かな  
明月の松影しるき湯槽かな



粕谷正則

霜焼けの手を合せゐる祈かな  
渡りゆく吊橋ゆるゝ野分かな  
城跡の亭の小庭や秋ざくら  
入梅や部屋しめきりて蚊の一つ  
教会の十字架たかし寒雀

中 島 正 博

明星のまばたき塞き夜道かな  
日だまりや一列になる日向ぼこ  
颱風や茄子の葉裏のてんと虫  
夕立やあとの溜りの水すまし  
秋の夜やコップに浮きし紙上虫

中 沢 益次郎

梅落花つるべの水に浮かびけり

颱風に笠をとられし案山子かな

野良猫の食をあされる梅雨かな

やゝ寒く人を窺ふ鼠かな

南瓜の葉そよげる窓の月明し

渡辺 幹 夫

初霜や老母の乗りし牛車  
新しき家のゆふべや置炬燵  
病床の一輪挿しの夜長かな  
木の蔭に土浴ぶ鶏の暑さかな  
颱風やせばき戸口に人の立つ

柳 下

満

獅子舞に子供にげこみ初笑

通学や草の芽露に足ぬらし

蜜蜂の翅音コスモス揺れにけり

岩角に雲の声きく登山かな

萬緑の庭のしげりや花ざくろ

島田

実

庭木々に大根さがりて夕日映ゆ  
エビガニ釣りの餌にされたる蛙哉  
授業にも飽きくし窓の毛虫かな  
自転車を習ふ乙女や初夏の風  
渋柿のうみてしたゝる夜寒かな

峯岸

稔

蔦枯れて塀の落書あらはるゝ  
濡れてゐる選挙のピラや五月雨  
草深き土橋のへりの野菊かな  
夕餉後の縁側にあり花火箱  
ユニホーム汗まみれなり夏の暮

津坂宗茂

門松にふれて人くる年始かな

春の日や声たかだかと応援団

秋晴や峯までつづく道ひとつ

道遠しひぐらしの声耳につく

春寒く焚火の顔がものすごし



奥平守男

元日やラヂオの音と雨の声

初霜や南天赤く菊白し

書をめくる風さら／＼と青葉哉

柿食ふや木の葉ちらして百舌の翔つ

合羽ほす荷鞍の上やなめくぢり

齋藤守弘

浮浪児の姿にも年迫りけり  
稲むらに宿かる猫の寒さかな  
こぼれ栗葉の中で越す寒さかな  
焼藪の匂ひただよふ焚火かな  
卷雲のながるゝにとぶ蜻蛉かな

齊藤守弘

朝寒や声ふれてゆく納豆売  
藪俵はこぶ列車に遮断され  
林道の風ひやゝかに蟬の声  
昼寝する子の顔しろし秋の風  
木枯の吹きすさみたつ一軒家

原 泰 英

焚火する音のきこえて暮近し  
麦ふみの背にほかくと春日かな  
我畑にはやおとづれし雲雀かな  
遠足にまじりし母や萩の原  
台風のすぎたるあとの田植かな

青木安雄

朝水つづけてはらぬ四温かな  
稻刈りや夕焼にひかる父の鎌  
池水の風にはしれる落葉かな  
蠅を追ふ馬の振尾の野路暑し  
軒下で薪割る音や初夏の雨

牛窪保雄

羽子ひとつつ氷れる池や今朝の春  
家中でになふ箆笥や煤払  
注連縄の屑も塵なり掃納  
前を行く乙女もすなり懐手  
山茶花や囧啼く日のあたゝかき

大井康雄

温床に厚唇の南瓜かな

ものくし夕闇の庭の猫の恋

荒びたる山祇の石に落葉降る

新校長スポーツシーズン迎へけり

わびしさは人にはあらず松飾

加藤康夫

前後向く者ありし焚火かな

初雪やみがきあげたるスキー靴

こほろぎが机の中で鳴きにけり

栗拾ひ朝日と共に出掛けたり

蜻蛉釣り小石に足をとられけり



竹 沢

靖

晩秋や落葉にまじる蟬の翅  
美しや路の馬糞の霜の山  
川底に月を沈めて落葉かな  
天井やとどかんばかり燕の子  
提燈の火のうづまきや夏祭

青柳安彦

流れゆく水に影あり柳女郎  
釣上げしふぐもてあます岩の上  
浜辺より友なつかしむ月夜かな  
泥濘をすくひし下駄や飛ぶ螢  
道端につゝじの咲きて山近し

深井康弘

風や日も照り雲も吹き散らす  
花ならぬ身とな思ひそ薄の穂  
光るほど夜のしづかなる月夜哉  
芋の葉の中や銀河のこぼれ水  
鳴く声のつくろひもらす秋の蟬

石井保行

薬塚のならばし堤や冬の月  
日たかく初荷の通る街路かな  
夜靄ふかき川ににじむや誘蛾燈  
日暮るゝになほ麦打の聞ゆなり  
停電に町しづかなり虫の声

平岡泰之

冷かになりしと思ふ顔洗ふ

墓に来て葉桜を見てなほ淋し

釣魚の宙にはなれし尾花かな

グランドや深き枯草白い線

草野球蝸鳴くも尚止まらず

金子 勇 二

雪折れの竹の音きく燈下かな  
芒見てかなしむ吾を憎みけり  
釣革に藪掘りし掌の登校かな  
五丈岳よづるロープや岩燕  
囀籠の下のわらべや春の顔

佐々木 雄 司

蛙なく夜道てらしてひとり行く

花 菖蒲ぬれて草刈る人居たり

夕 鴨のたてし水輪は葦に消ゆ

雲 低く水に菖蒲は静かなり

風 車まはるや子らの夢のせて

遠山融治

夕焼やただ草ばかり風の音  
柿二つたもとにくれし養母かな  
梅雨明けの月に青梅落しけり  
早乙女を家まで送る遠蛙  
古井戸の残りてさむし木の芽風



松村祐二

遊覽バスの徐行の崖や烏瓜  
神主も夜店をのぞく祭かな  
雲の峯くづれて登山バスを待つ  
蘆の花大きくわれて船着きぬ  
松毛虫うちたる兄の墓石かな

## 笛木勇三

二本引いて空籤なりし年の暮  
八手の実花火のごとく咲きにけり  
教室の隣の道や山車を曳く  
南天や落ちさうにとぶ尾長鳥  
南風ふきてちりけり梅の花

高橋 幸男

甘藷床の足元ちかしけらの声

繰りて見る辞書の小さき夜寒かな

閑けさや師の声たかき卒業日

蕪菜つむ雨にとびゐる蝶々かな

虫啼くや夜光時計のきざむ音

## 前田行雄

朝風呂に浸りつ聞きぬ羽子の音  
門松をとり去りし跡や風寒し  
井戸端におりし雀や夕寒し  
稻荷山松の木々にも秋の声  
水深く木の倒れゐる野分かな

牧 田 幸 雄

三日目に晴れて人出や初大師

蒼穹に花コスモスの乱れたり

向日葵の日に背を向けて咲きにけり

蟬ないて暑苦しきの授業かな

活百合の匂ひみなぎる部屋を出づ

有山 豊

初雪や杜かすみたる夜明前  
 大岩に寄する潮の激し冬  
 切干の上にかつ散る紅葉かな  
 風薫る朝焼まへの穂麦かな  
 コスモスの一輪挿しやわが机

鈴木

洋

埋火を掻き出す客や春の雪

スタートラインに散りくるいてふ落葉哉

足すべる雨の小径や菫の花

夏の夜の音にみつけし水場かな

颱風にランプひとつの夕餉かな

堀

陽

敗戦にスパイク見つむ夕時雨  
黙然と引あぐチームや夕時雨  
夕時雨課外を終えて帰り路  
鶯を障子の孔から覗きけり  
蛙なく夜みちひとりや天の河



水野策

銀婚の夫婦もまじるかるたかな  
縫物のはたの寝顔や春の宵  
稲刈りに衰へそめし蝨かな  
線香の燃えのこる墓や花木椽  
洗場の藁のたわしや花しようぶ

小林洋左

暮れ切つて顔ばかり見ゆる焚火かな

自転車のペタルのひかる枯野かな

縁春日とりのこされし火鉢かな

紫陽花や風すぢ見ゆる水溜り

熱球の絶間に仰ぐ秋の空

田 口 陽 世

行きすぎてまたかへり見る初姿

杵音の絶えたる庭や夜の雪

朝寒や始発電車の破れ窓

友送るバスの砂塵や夏木立

朝露に花おもたげなれんげかな

## 武 長 洋 平

見馴れたる顔改めて御慶かな  
菊を見る人のうしろの人通り  
生垣の手入ながめて風邪寝かな  
居睡りの眼鏡あぶなし春炬燵  
杖立てゝほこらしげなり登山客

鈴木美男

ふたつみつ夜に入りさうな雲雀かな  
春寒く葱の折伏す鳥かな  
春の山筧に沿うて登りけり  
植木師の梯子に秋の晴れにけり  
岸草をあかるく照らし盆提燈

## 平岡義男

井戸端や雪のうへなるかがみ餅  
月光の霜にも見えて風強し  
椗の葉の音の寒さや月皓し  
轍跡に水のにじみしついたりかな  
水量の増せる田堀や花菖蒲

三友善夫

転げゆく球を見てゐる枯野かな

ケールブルの窓すれすれの若葉かな

登校や机々の日焼顔

客舟の通りしあとの河鹿かな

髪を梳く背に風鈴の鳴りしきり

沼田芳造

手袋にゆうく<sup>く</sup>と指出でにけり  
年の瀬や闇トラツクの音迅し  
雑炊に今日一日を忘れけり  
人ひとりこちらへ来るや雪景色  
激戦に敗れて蟬の声しげし



中 義 智

雲雀啼くや野にかげろふの立つ見えて

秩父嶺にかぶりつきたる寒さかな

登山杖忘られてある清水かな

梅雨明や厨の柱の蟻の列

手拭に摘みためておく土筆かな

宮崎義宣

雲の飛ぶ峯に咲きけり釣鐘草  
雁坂に見てたつ富士や秋の朝  
朝寒や秩父の山の遠く見ゆ  
尾花ゆるゝ丘よりのぞむ遠き山  
月白し若葉の匂ふ宵の程

稻 生 義 彦

無花果のいくつも裂けて朝の雨

犬あそぶ庭のみだれや霜柱

野老蔓からみしまゝや冬木立

五月雨に下駄をとられし子供かな

重さうに垂りたる房やぶだう棚

桃井良之

葉の落ちし林の道や冬の雲  
寒々と三日月の照る土橋かな  
春の野に昔の我を探しけり  
水飲んで胴震ふ馬や朝寒き  
朝寒や新聞のまだ来てをらず

大 沢 米 吉

鶏のあそぶ日和や竹の秋

菜の花は丈異にして咲きにけり

稲穂垂れて影あらはなる案山子かな

冬空やきちんと閉ざす石の門

空晴れて歌声のわく初荷かな

松平

理

さゝ鳴や雨もよひなる日暮時  
笥の留守してをりぬ戦災寺  
城址や梅の古木に月浅し  
注し水に尾鱗逆立つ金魚かな  
すくくくとジャガ薯のびる床の下

塩 入 亮 善

放課後の時刻となりて雨寒し

ウインドや羽子板見入る異国の子

南天の朱ばしりそめし秋日かな

除草せし庭ひろびろと今朝の秋

無花果やうれて木肌の蟻の群

## 大野良三

柿ひとつ取のこされて空青し

薰風や木の間のみゆるゴルフ場

ひるがへる七夕さまを結びけり

鎌研ぎし水さけ行くや蟻の列

青い柿嵐と子等にとられけり



清水良平

バス待てる列おしなべてシヨールかな

仰ぎ見る帰雁の空の曇りけり

苗代にうつる星なし梅雨に入る

ポマードも香る若葉のコートかな

眼鏡とればくづれて見えぬチユールップ

佐々木 良 祐

高麗王のねむる廟所や冬木立  
空高くうす日のもるゝ枯野かな  
風の日や埃りの中の麦を踏む  
火の絶えし跡黒々と焼野かな  
公園の花に漕ぎ出しポートかな

昭和五十年十二月一日発行

発行者

埼玉県立川越高校

第三回卒業生句集発行委員会

編集代表者

大沢米吉

印刷所

神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一―六―二四

埼玉県川越市旭町一丁目二二番一号

益子弘道

(句集編集委員会)